

特242

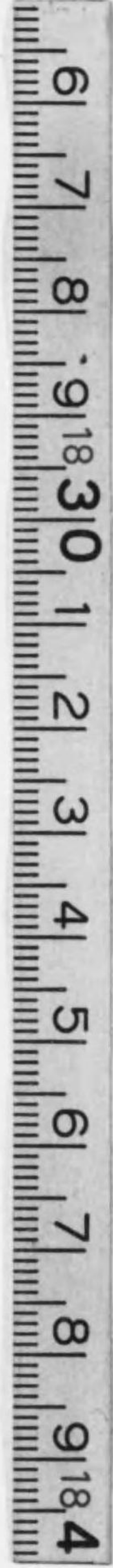
27

愚

禿

親

鸞



始



3

2

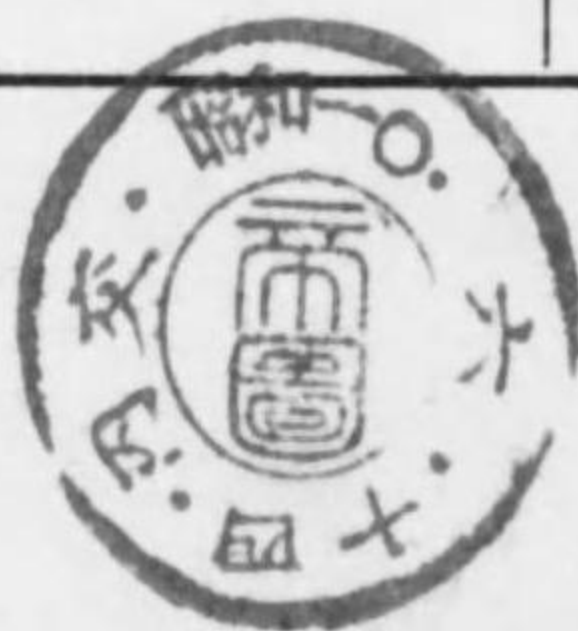
特 242
27



梅原真隆先生述

禿
親
鸞

信
道
會
館
版



愚 禿 親 鸞

つねの御持言

親鸞聖人とはどんなお方であるか、また、その親鸞聖人がいかにして救はれたのであるか、これを觀察し、そしてこれを解説するには、いろ／＼の方途もあることでありませうが、私は親鸞聖人がみづから愚禿と名告あらせられたことに深い興趣を感じるものであります。

およそ、自分で自分によびかけるといふこと、自分で自分の名をよぶといふことは、いかにも自覚せるいのちの表現であります。わが聖人が自分で自分の名をよびかけられたところに、めざまきつた諦観を窺ふべきでありませう。さらに、數おほき文字のうちから、特に、愚の字

と禿の字とをえらびとつて、御自名になされたところに、深刻な生命のひかりがひらめいてゐることを見のがしてはならないのであります。仍つて、私はこゝに親鸞聖人のおもかけを素描し、その救ひの本質を顯開するために、この愚禿のこゝろを味ふてみたいとおもふのであります。

さて、その愚禿のこゝろを味ふにも、いろ／＼の見方と立場とが存して居ります。けだし愚禿の二字は聖人の全き生活と全き教義とが象徴されてあるからであります。さりながら、私は今こゝに聖人自身のお言葉をいたゞいて愚禿のこゝろを窺ふてみたい、すなはち、聖人の御持言によつて、最も端的な、そして最も直接せる理解をもとめやうとおもふのであります。

聖人の御持言としてつたへられるものが、凡そふたつありまして、そのひとつは、聖人の直弟子唯圓御房の編まれた『歎異鈔』の總結に採録されてをります。

「聖人のつねのおほせには、彌陀五劫思惟の願を、よく／＼案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおほしめしたち

ける本願のかたじけなさよと御述懐さふらひしことを、いま、また案ずるに善導の自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、贖劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流轉して、出離の縁あることなき身としれといふ金言にすこしもたがはせおはしません。されば、かたじけなくも、わが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如來の御恩のたかきことをもしらずして、まよへるを、おもひしらせんがためにさふらひけり。まことに、如來の御恩といふことをば、さたなくして、われもひとと、よしあしといふことをのみまふしあへり。聖人のおほせには、善惡のふたつ總じてもて存知せざるなり、そのゆへは、如來の御こゝろによしとおほしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおほしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしきをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのこと、みなもて、そらごとたわごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ、おほせさふらひしか。まことにわれもひとと、そらごとをのみまふしあひさふらふなかに、ひとつのいたましきことのさふらうな

り。そのゆへは、念佛ねんぶつまふすについて、信心しんじんのおもむきをもたがひに問答もんたふし、ひとにもいひ
きかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論さうろんをた、かひかたんがために、またく、おほせにて
なきことをも、おほせとのみまふすこと、あさましくなけき存ぞんじさふらうなり。このむねを
よく／＼おもひとき、こゝろえらるべきことにさふらう。」

このなかには、二節にせつの御持言ごぢごんがあげられてあります。第一節だいいせつは「彌陀みだ五劫ごこつ思惟しゆいの願ねんをよくよ
く案あんずれば、ひとへに親鸞しんらん一人ひとりがためなりけり。されば、そくばくの業ごふをもちける身みにてあり
けるを、たすけんとおほしめしたちける本願ほんねんのかたじけなきよ」といふのであります。これは、
彌陀みだ如來にょらいが五劫ごこつといふながいあひだ、思案しあんに思案しあんをかかねて御おんちかひなされた本願ほんねんは、つくづ
くかんがへてみると、たゞたゞこの親鸞しんらんひとりのためであらせられる。おもへば數かずしれぬ罪業ざいごふ
をもつたこのわたくしを、たすけたいばかりにおもひた、せられた本願ほんねんであらせられる、なん
としたかたじけないうことであらうといふ意味いみの御述懐ごじゆくわいであります。第二節だいにせつは「善惡ぜんあくのふたつ、
總そうじてもて存知ぞんちせざるなり。そのゆへは、如來にょらいの御おんこゝろによしとおほしめすほどにしりとほ

したらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來にょらいのあしとおほしめすほどにしりとほしたら
ばこそ、あしきをしりたるにてもあらめど、煩惱ぼんなん具足ぐそくの凡夫ぼんぷ、火宅くわたく無常むじやうの世界せかいは、よろづのこ
と、みなもて、そらごと、たわごと、まことあることなきに、たゞ念佛ねんぶつのみぞまことにておほ
します」といふのであります。これは、自分じぶんは善よいといふことも悪わるいといふことも、ふたつな
がら本當ほんたうのことはわからない愚おろかなものである、如來にょらいのおこゝろに善よいと思召おぼせすほどに知りぬ
いたなら、善よいといふことを知つたことにもならう。また、如來にょらいのおこゝろに悪わるいと思召おぼせすほ
どに知りぬいたなら、悪わるいといふことを知つたことにもならうかなれど、何なんといつても煩惱ぼんなんづ
くめの凡夫ぼんぷである。火ひのついた屋宅いへのやうな無常むじやうの世よのなかである、すべてのことは何なにから何なに
まで、そらごと、たわごとばかりで、眞實しんじつのこと、てはひとつもない。たゞ、そのなかにめぐ
まれたお念佛ねんぶつだけが眞實しんじつであらせられるのである、といふ意味いみの御述懐ごじゆくわいであります。この二節にせつ
の御語ごごには、特とくに唯圓房ゆゑんぼふは「聖人しやうじんのおほせ」と牒しめし、しかも「つねのおほせ」としるしづけて
あるとほりに、聖人しやうじんのいつてもくりかへしくりかへして御述懐ごじゆくわいなされた御持言ごぢごんであつたことが

知られます。そして、これは二節とは云ふもの、實は一具の御持言であります。すなはち、前のものは、罪ふかいこと、あさましいことの述懐をのべ、後のものは、愚かなこと、つまらないものであることをのべられたのであります。換言すれば前のものは罪業の深信後のものは愚凡の内省であつて、詮ずるところ、このふたつの御持言はひとつにまとめられて、いよく、あざやかに愚禿の信心をいひあらはされたものであります。

他のひとつは、本願寺の覺如上人のものされた『改邪鈔』の第三條に抄録されてあるものであります。

「當世、都鄙に流布して近世者と號するは、多分一遍房他阿彌陀佛等の門人をいふ歟。かのともがらは、むねと後世者氣色をさきとし、佛法者とみへて、威儀をひとすがたあらはさんとさだめ振舞敷。わが大師聖人の御意はかれにうしろあはせなり。つねの御持言には、われはこれ賀古の教信沙彌の定なりと云云。しかれば、絆を専修念佛停廢のときの左遷の勅宣によせましまして、御位署には愚禿の字をのせらる。これすなはち、僧にあらす俗にあらざる義

を表して、教信沙彌のごとくなるべしと云云。これによりて、たとひ牛盜人とはいはるとももしは善人、もしは後世者、もしは佛法者とみゆるやうにふるまふべからずとおほせあり。」このうちにも、二句の御持言がのせてあります。即ち「つねの御持言には」と冠して「われはこれ賀古の教信沙彌の定なり」とのべ、また「たとひ牛盜人とはいはるとも、もしは善人、もしは後世者、もしは佛法者とみゆるやうにふるまふべからず」とのべられてあります。この二句は一聯の御持言でありまして、この親鸞は賀古の教信沙彌の生活を手本として、ありのままの凡夫のまゝ、てお念佛まふすものである。たとひ、世間からは、外道あつかひにされて牛盜人であると罵られることがあつても、善人ぶつたり、後生ねがひの風情を粧ふたり、佛法者めいた振舞をして、欺いてはならないといふ意味の御ことばであります。これは、賢善精進の聖者の假面をかむつて、さとりすます生活の虚假を打破つて、生れつきの凡夫さながらの救ひをよろこばれた愚禿の行持をのべられたものであります。

この二聯の御持言によつて愚禿の信心をうかゞひ、愚禿の行持をしのぶことができまゝす。こ

れによつてわが聖人の本来の面目を髣髴せしめることができるであらうかとおもひます。仍つて、聖人を窺知せんとせらるゝ方々に、取敢へず、この二聯の御持言をしづかに味ふていたゞきたいとおもふのであります。

愚禿のころ

この御持言を味ふには、まづ愚禿といふ字義と、そこに表象された意味について、一往の領解を必要とするかとおもひます。

「愚」とは愚痴といふこと、暗鈍といふこと、やさしくいへば「おろかなこと」であります。われらのこゝろが智慧の光を失つて盲たこととあります。ちひさな星ひとつまた、くこともない晦夜のやうな漆黒の心境であり、鉛をとかしてながしたやうな鈍りきつた生き方である。つまり、無明の迷妄をいひあらはしたのであります。

「禿」とは「かむろ」とよむ字であります。もとく修道の聖者は剃髪した圓顛をその聖き表示としてゐられる次第であります。蓋し、髪は人間の愛慾の象徴でありまして、俗人は愛慾を生活の基調としてゐるから髪をのばして結ふて居ります。しかるに、聖者は愛慾を否定して更生するところから髪を剃つたのであります。そこで、剃髪染衣の圓顛は禁慾生活の表示となつたのであります。ところが、かゝる禁慾生活の聖者の生活が破綻したとき、圓顛に髪が生えかけてきます。これが即ち禿の姿であります。だから、禿とは聖者生活の破綻をしめすものであります。即ち破戒の姿そのものであります。無戒名字の比丘と稱せらるゝものであります。凡そ、人生の向上的機能として、一般に認められるものは知と行とであります。知とは價値の認識であり、行とは價値の實現であります。これによつて人生は向上してゆき、たかめられてゆくのであります。例せば、旅ゆく人には道を見出すための眼がなくてはなりません。またその見出した道を歩いてゆく足がなくてはなりません。知は眼であり、行は足であります。むかしから、知目行足といふ言辭もありますが、いかにも、わかりやすい喩顯であるとおもはれ

ます。

佛教においては、この知目と行足とが大切なものとされてあります。これを完全せられた佛陀を明行足と號することも注意すべきことであります。佛教の戒定慧の三學といふも、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅密といふも、詮じつめたところは、この知と行とを向上の資糧とした聖者生活の清規に外ならないのであります。してると、愚禿とはこの知目と行足のかけはてた存在であり、三學無分の存在であつて、聖道の清規に乖離したる反宗教的な現實の暴露であります。

以上に抄録いたしました『歎異鈔』の御持言を窺つてみますと「そくばくの業をもちける身」とは禿の表示であり、善惡のふたつ總じてても存知せざるなり」とは愚の表示であります。かうした、おこゝろもちは聖人の撰述の全般に顯れてゐるものであります。今試みに『和讃』の結嘆としてあけられた一首「是非しらず、邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなければども名利に人師をこのむなり」にも愚禿の悲歎が歴々としてしのべれます。この一首は聖人が八十

八歳の御筆であつて、『三帖和讃』の最後に記されたといふことを注意すると最後の御述懐であることに氣づかれます。最後の御述懐であると共に生涯の御持言であつた次第であります。「是非しらず、邪正もわかぬこの身」とは無知をかなしむこゝろであります。是非の識別もてさす、邪まなこと、正しいことの筋道もわからない身であるとは「愚」の覺知であります。また、「小慈小悲もなければども、名利に人師をこのむなり」とは罪惡のなけきてあります。慈悲のこゝろといふものは微塵も有たぬ身でありながら、たゞ名聞利養にほだされて人師ぶつて、たかあがりをしてゐるといふ「禿」の諦観であります。つまり、愚禿は人間がどうしても、自分で自分を救ふことのできないといふ悲痛な悲嘆であります。だから「愚禿」の名告はそのまゝ、「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」といふ罪惡感の戰慄を帯びた表白であります。この愚禿の名告は、素裸なる凡人の現實相をさらけ出してあります。さながらの人間の内兜をみぬいたものであります。いふまでもなく、これは悲しいめさめてあります。人間はながいあひだ自分を救ふことがで

きるものと思ひ込んできました。人間の賢明と善良とによつて、生活を淨化したら、そこに尊い聖があらはれてくるといふ豫想をいただき、何等かの意味と価値とを自認して、人間のうちに、大地のうへに眞實に生きぬかうといふ立場をもとめてゐたのでありました。しかるに、この愚禿の諦観は、ながいあひだ人間の抱いてきた夢と幻と誇と生き甲斐のすべてをうちくだいてしまひました。なんといふ、いたましい幻滅のこゝろでありませう。なんといふ怖しい荆冠でありませう。わが聖人はこの幻滅を視つめ荆冠を忍んで、誠實にそして、まともに人間といふもの、ありさまを諦観せられて、愚禿と名告あらせられたのでありました。いふまでもなく、愚禿のこゝろは相對的ではなくて、絶對的であります。人間そのもの、不完全をみとゞけられたものであります。いふところの「愚」は人間の立場における相對的な「賢」に對立したものでなく、また、いふところの「禿」は地上に於ける「善」の對辭として存立するだけではありません。あらゆる人間の智慧も、如來を觀知することはできないといふ絶對的な愚の覺知でありあらゆる人間の善根も、淨土に往生することはできないといふ絶對的な惡の内感であります。

言葉をかへていへば、知の缺乏したる愚でなくて、地上の知そのもの、愚かさを意味するものであります。善の不足したる惡でなくて、凡人の善そのもの、惡を意味するものであります。かくて、愚禿のこゝろは人間そのもの、愚と惡とを内省せるものであり、人間そのもの、不完全を諦観せるものでありまして、人間をして奈落のどん底にめざめしめた絶對的な省察でありました。そしてこの人間そのもの、不完全を諦観せしめた愚禿のこゝろこそは、完全なる聖法すなはち如來を信知する新しい立場をなすものであります。否な、如來に完全な聖を仰ぐことのできた信心のめざめによつて、人間の不完全が省察され、愚禿のこゝろが内感されたのであります。この意味において、地上に最大の絶望をもたらした愚禿のこゝろはそのまま、人間に最高の光悦をもたらしたのであります。この愚禿の暗い影が地上に印象せられたところには、一實眞如の月の光が天空にかゞやいてゐることを知らねばなりません。松影のくらきも月の光かな、人間の無知と罪業を省みる愚禿の諦観はやがて如來の智慧と慈悲とを領納せる信心に外ならないのであります。人間が人間に望を失ふたときに、眞實の如來を仰ぎ、如來の救

ひにおまかせすることができるのであります。人間の不完全を知るこゝろは、人間のはからひでは人間を救ふことのできないといふ機の深信であり、如來の完全を仰ぐこゝろは自ら救ふ手が、りのない人間をこのまゝが願力によつて救はれる法の深信であります。こゝに凡小自力のはからひをはなれて知來の願力即ち他力のおんはからひに歸順する轉心が行はれたのであります。「雜行をすて、本願に歸す」と仰せられた愚禿親鸞の轉心はこれを示すものであります。これを要するに、愚禿のこゝろは絶対のおん救ひを信知する新しい心境の啓拓であつたのであります。

かくて信仰された如來の御計らひとは本願の念佛であります。上にひいた『歎異鈔』の御持言には「彌陀五劫思惟の願をよく／＼案すれば親鸞一人がためなりけり」とて本願の救済を感荷し「たゞ念佛のみぞまことにておはします」といふ念佛の眞實を讃嘆せられてあります。そこで愚禿のこゝろは凡小のはからひをうちすて、本願他力にまかせたてまつる絶対依憑の信心であります。義なきを義とする他力念佛を専修する隨順であります。愚禿のこゝろは絶対的な

謙下であります。愚禿親鸞ほど低い大地に下座されたお方はありません。いらばん低い大地にひざまづいて、いらばん高い聖の全き相を拜むことができたのであります。即ち愚禿のこゝろによつて、絶対的な高次の統一法たる「聖」が信仰せられました。この聖の顯現と表象が、本願であり、念佛であります。本願とは「汝を護らん」のおちかひであり、念佛とは「我に來れ」のお喚聲であります。われらは如來に祈つて救ひをもとめるではありません、如來に念ぜられて救はれてゆくのであります。われらは如來を求めて一致をはかるのではなく、如來に念ぜられて救はれて攝取されてゆくのであります。一切の群生がみづから色々にはからふて技巧するうちは邪偽であり權假である、たゞ、聖の全現たる如來のおんはからひにおまかせする信心によつてのみ眞實の救ひをめぐまれるのであるといふのが、わが愚禿親鸞の信心であります。

次にわが聖人はいかなる生活をおくられたてありませうか。これについても愚禿の名告が鮮やかに解説して居ります。上に述べた、「改邪鈔」のうちに「つねの御持言」として示された「われはこれ賀古の教信沙彌の定なり」の一句は、最も率直に愚禿の行持を物語るものであります。「われはこれ賀古の教信沙彌の定なり」わが聖人はその生活の典型を教信沙彌にもとめられたのであります。ふりかへつてみれば数おほき賢聖のあらせられるのに、それらの賢聖の方々を理想としてえらばずして、いはゞ平凡な沙彌である教信を理想の人物としてえらばれたのは、そもそも何故でありませうか、實はこゝにわが聖人の生き方の特徴が存するのであります。さて、わが聖人のお慕ひなされた賀古の教信とは、いかなる人物であらうか、まづ、それから申上けるのが順序かとおもひます。

その教信の傳記は慶滋保胤のあつめた『日本往生極樂記』とか、永觀のしるした『往生十因』とか、乃至、敬西のしるしたものであらうとおもはれる『進修集』とかいふものにのせられてありますが、かなり、趣ふかく傳説化されておりますし、また、その傳説も時代の趣好をうけ

て次第に變化したやうでもあります。今、その原始のかたちであらうかとおもはれる『日本往生極樂記』にしるしてあるところによつて、その一斑をのべます。

攝津の國、島下郡の勝尾寺に勝如といふ聖があつた。その勝如は寺より離れて草庵をこしらへ、その草庵のなかに蟄居すること十有餘年、言はず語らず、また弟子たちにも滅多に形をみせぬ、ひたすら沈黙のうちに靜觀して居たのである。あるとき夜なかに草庵を訪れて柴の戸をた、くものがあつた。しかし何分、勝如は無言の行をまもつてゐるので、その來意を問ふことはできぬ、たゞ咳聲をもらして客にこたへた、すると戸の外に立つた人の陳べて云ふやう「われはこれ播磨國賀古の驛の北のほとりに住む沙彌教信である、今日、極樂に往生しようとおもふ、上人は明年の今月に命終して來迎をうけるであらう、この由來を告げたいのでわざ／＼たづねてきました」と云つてしまふと、ふいと去つてしまつた。勝如はおどろいてあやしんで、翌日のあさ、弟子の僧なる勝鑿をつかはしてその賀古をたづねさせ、ゆふべのこの眞偽をしらべさせた。勝鑿はかへつてきてものがたるやう「賀古の驛の北の方に

竹の廬がありました、その廬のまへに人が死んでゐる、たくさんの猫があつまつてその死骸の肉を競ふて喰べてゐる、そして廬の内にひとりの老嫗とひとりの童子が哀しみ哭いてゐました、そこで「なぜそんなに悲しんでゐるのですか」と尋ねると、老嫗のいはく「廬のまへに死んでゐるのは私の夫の沙彌教信であります、一生のあひだ晝も夜も怠りなく、彌陀の名號をとなへて居りました、そこで教信を雇ふ隣里の人々は阿彌陀丸とよんでゐるたくらいであります。今、妾はこんな老後になつてから、頼りにする夫に死にわかれたので哭いて居るのであります、この童子は教信とのあひだにできた兒であります」とさめ／＼と泣いて物語ましたと、勝鑿はくわしく見聞のとほりを話しました。これをきいた勝如は大へん感心し「わたくしの無言の行は教信の念佛の生活には及ばぬ」といつて、それから聚落にてかけて自ら念佛し、また他人に念佛をすゝめ、恰度、教信の豫言した期日に急に往生をいたしました。この傳記によると、教信といふ人は播州の賀古あたりの人で、極めて平凡な貧しい日傭ひにすぎなかつたのであります。妻子を帯して田畑を耕しながらお念佛をまうしてくらしたのであ

りました、つまり生れつきの凡夫のまゝ、てお念佛を申してゐたのであります。そして、それは沙彌生活として意味づけられたのであります。

平安朝の中頃から已後、宗教界に沙彌生活なるものがあらはれてきました。この沙彌生活の群、即ち自由人の群によつて、この平凡な教信が注意をひきつけることになりました。いはゞその平凡なところに意味をみとめられて、もてはやされたのであります。

こゝに「沙彌」といふことについて、すこしばかり注解しておく必要があらうかとおもひます。

沙彌といふのはもと戒律の上のある階位、即ち比丘になるまでの一階位をあらはす稱呼であります。沙彌といふのは梵語であります、支那では「息慈」と翻譯いたします。息とは世染の情をやめること、慈とは群生を慈しむこととあります。すなはち佛道を修行することとあります。しかし、沙彌とよばれるうちはその修行の初歩でありまして、剃髪してゐるが未だ完全な戒律すなはち具足戒をうけない階位をさすのであります。これを要するに未だ完成し

ない出家、出家になりきらない出家といふ意味の稱號であります。ところがわが國においてはその意味が轉化して「出家らしくない出家」といふほどになりました。「元亨釋書」に「國俗髪を剃て梵儀を全ふせず、妻子あるもの家にありて沙彌と稱す」としてあります。つまり出家の清規によつて律せられない在家の行者であります。家にありて生計の業にいそしみながら、妻子をはぐくみながら道を修め行ふもの、凡夫ながらの生活のまゝで救ひを見出さんとする教界の自由群をさして沙彌といふのであります。

こゝとした沙彌生活のなかにおいて出色のものは賀古の教信沙彌でありました。わが親鸞聖人が教信を慕はれた點もまた、やはりこの沙彌生活者といふことに存するのであります。しかし、平安朝から鎌倉時代にかけてあらはれた隠遁者たちよりも、一層ふかいこゝろもちを以てわが聖人はこの教信を慕ひその生活に新しい意味を見出されたのであります。

わが聖人が教信沙彌に殊にふかい親しみを感じられたのは、恐らく越後の配所にながされてからであらうかとも推察せられます。

何となればかの愚禿といふ名乗りをあけられたのは越後の配所でありました。そしてその愚禿といふ名乗りをあけられたこゝろもちを自ら記録して「僧にあらず、俗にあらず、この故に禿の字を以て姓とす」とのべられてあります。この「僧にあらず俗にあらず」といふことは、即ち前に述べた沙彌のこととあります。「進文集」の教信傳には「僧にあらず俗にあらず」とのべてあります。そこで、さびしい越後の邊地にながされ、しづかに大地にひざまづいて合掌念佛しながら、愚禿親鸞と自分で自分をよばれたとき、髣髴として播磨の加古野に田をたがやしなから、お念佛申して一生を終つた教信の傳をおもひうかべられたこととありませう。そこで「われはこれ賀古の教信沙彌の定なり」と述懐せられたのであります。愚禿の名告は無戒名字の沙彌生活の表示に外ならないのであります。

人間性を省みて

さて沙彌生活といふことはいかなる點において意味を有するのでありませうか、沙彌生活といふことは生れつきの凡夫のまゝ、さながらの人間生活のうへに救ひを見出さうと云ふのであります。

これまでの宗教は人間の生活から自然の本能を抑制するとか、あるひは理性の淨化をもとめるとかいふことによつて、救ひを見出さうと試みたのであります。かくて家を出て慾をすて、人生を改造して、しかる後に救ひをもとめやうとしたのであります。

本能の抑制も理性の淨化も、それが人生にとつて大切なもの缺くべからざるものであることは云ふまでもありません。また、そうせずにおれないのが人間の内面性といふべきでありませう。人間の動かしがたい願求であります。けれども、もう一步ふみこんで省察すべきことは、その本能の制限とか理性の淨化とかいふことが果してどれ丈けまで行はれることであらうか言葉を換て云へば、禍とか悪とかいふものをとりのけて、この地上を善と福とによつて莊嚴することが果して可能であらうか、これが重大な疑問でなくてはならないのであります。わが聖

人は大地の人間生活は善根と幸福とによつて淨化されつくすことのできないものと諦観されました。煩惱具足の凡夫である、火宅無常の世界である、よろづのことみなもて、そらごとである、たわごとである、まことはひとつもない、清淨と眞實は地上に見出されないと、深刻に諦観されたのであります。この諦観が愚禿の表示となつたのであります。凡夫は凡夫であるより外にみぢはない、凡夫を刻んで如來をつくることは不可能であることを達観されたのであります。

人間性に對する見解がこれまでのものとすつかり變化してきました。即ちこれまでのやうに人間がある改造を行ふたら如來になれるといふ空想が破れて、人間はどんなに改造しても如來にはなれない、また如來になるやうな改造は人間にとつて不可能であることが見出されたのであります。

そこで聖人は凡夫のまゝの生活、人間のありのまゝの生活のうへに救ひを見出されたのであります。換言すれば宗教のための人生でなくて、人生のための宗教をひらかれたのであります。

大地に生きるありのまゝの人間のまへに宗教をうちひらかれたのであります。

例せば、こゝに肺結核といふ病によつて人身が斃れないやうにする方途をかんがへるといたします。これには少くとも二の方途があります。第一の方法は肺病のバチルスを地上から驅逐することによつて人身を安全にしようといふのであります。しかし果してバチルスを驅除しつゝくすることができるかどうかを考へなくてはなりません。第二の方法は地上からバチルスを驅除しつゝくことが不可能であるから、バチルスを喰つても倒れないだけの免疫性を有する身體をつくることとあります。これはあまり適切な例示でもありませんが、これまでの宗教即ち聖者の道は第一の方法であり、第二の方法は親鸞聖人によつてひらかれた宗教即ち凡人の道にも比ぶべきであります。

かくて、越後から關東へかけてのわが聖人の生活は、凡夫ながらの沙彌生活のまゝ、合掌して、たゞ念佛まうされたのであります。

大地の宗教

さらにこの「われは賀古の教信沙彌の定なり」といふ御持言を、次の「たとひ牛盗人とはいはるとも、もしは善人、もしは後世者、もしは佛法者とみゆるやうにふるまふべからず」と仰られたこと、あはせ味ふことによつて、いよく聖者の假面にかくれてくらす人々と行方を異にせられた愚禿の行持をあざやかにうかぶことができます。善人になること、後世者になること、佛法者になること、つまり、ほんたうの純正な聖者になりきること、若くは聖人にならうとすることはいふまでもなく尊いことであり、また欣ばしいことであります。けれども、ほんたうに聖者になりきれないものが聖者のやうな假面を被つたり、あるひは聖者のやうに氣取つたりすることは見苦しいことでもあり、亦た危ないことでもあります。更に聖者であるといふ自認によつて、つけあがつたり、たかあがりして、眞實の如來に合掌することを忘れたらそ

れこそ大變です。また、ひどいになると惡魔の虎質を聖者の羊皮につ、んで、あさましい虚偽と邪惡を行ふことになりす。そこで「みゆるやうにふるまふべからず」と仰せられたのであります。聖者ぶつてはいけない、善人ぶつてはならない、後世者ぶつてはならない、ありのまゝの凡夫の姿にかへつて大地にひざまづいて恭敬のこゝろから合掌することを念ぜられたのであります。謙虚なこゝろで隨順することを心がけられたのであります。こゝに愚禿の行持がいよく、純化せられました。ことに、かゝる愚禿の生活、沙彌の自由群は教權的な比叡山ありの人々から「牛盜人」として外道よばはりされましたが、聖人はどんなに論議せられ評難されても、それらを忍従してしづかに跪いて徹底を期せられたところが、いかにも、たうとい充足とふかい落つきがあることを知らねばなりません。

この牛盜人のことは、もと『雜寶藏經』のなかに傳へられる傳説であります。因みに、引抄しておきます。

昔、罽賓國に離越といふ阿羅漢があつて、山の中に坐禪してゐた。たまく、牛を失ふた人が

あり、あとを追ふて山の中にいたり圖らずもこの離越尊者のところまできた、そのとき、あだかも尊者は草を煮て衣を染めてゐたが、忽ち、奇怪な光景があらはれた。すなはち衣はおづから牛の皮と化け、染汁は牛の血に變り、煮てゐた染草は牛の肉になつて見え、手に持つてゐた鉢盂は牛の頭に變化してしまつたのです。牛飼の人はこれを見て尊者は自分の牛を盗んで殺したのであると信じ、たちまち、尊者を捕縛して國王の法廷にうつたへた、王はたちどころに尊者を牢獄に下した。尊者は牢獄の苦役につくこと十二年、つねに牢獄の飼馬の糞を掃除することをつとめとしてゐた。さて一方では離越尊者にたくさんのお弟子があつて阿羅漢のさとりをひらいたものも五百人あつた。これらの弟子は突如として師匠の姿が見えなくなつたので、あちらこちらを探したが一向その所在がわからない、やがて離越の宿業の盡きんとするころ、ひとりのお弟子が師匠の尊者が罽賓の牢獄にあることを見出した。そこで弟子たちは國王にねがつて、師匠のために再審を乞ふた。王はかゝる沙門が牢獄にあることをきいて大におどろき、人をして獄中をしらべさせた。けれども、たゞやつれきつて馬糞

の掃除をしてゐる尊者の姿をみるだけで、それには氣づかない。そこで獄には沙門は一人も見あたらなかつた。たゞ獄卒があるだけであると國王にこたへた。そこで、お弟子たちは、それではすべての入獄者を解放して欲しい、そのうちにきつと尊者もゐられやうからと申出づるので、國王はそのとほりに、すべてに出獄をゆるした。そのとき、尊者ははじめて聖なる姿容にたちかへり、空中にのほつて神通を現じたので、國王はその不明を懺悔してゆるしを乞ふのでありました。離越尊者は何故にかゝる冤罪を忍び、牛盗人のつみをうけたかといふについて、前生の業縁を告白した。いはく、われむかし牛を飼ふてそれを失ふたことがある。そのあとを追跡して山の中に入ると、ひとりの辟支佛がしづかに坐禪しておいてになつた。私はその辟支佛を牛盗人であると誣めて、一日一夜の、しりつゞけたことがある。その因縁によつて私は三途の底におちたが、まだ業報がつきないので、今世でまたこんな牛盗人の冤罪をうけねばならなくなつたのである。と

こうした因縁によつて、牛盗人とは譴誣せられる悪名となつたのであります。わが愚禿の聖

人は、賢善の假面を粧ふて、自と他とを欺くよりは、むしろ譴誣の悪名を負ふても、生れつきのみ、の凡人として如來に仕へるところに深い生命のめざめを内感されたのであります。かうした御持言によつても、凡夫ながらの救ひを光闡し、大地の宗教を啓かれた、聖人の殉難の生活に感謝をさ、けず居れないのであります。

また、この御持言には、蓮如上人の『御一代記聞書』に親鸞聖人のお歌として引抄される「世の中のあまのこゝろをすてよかし妻牛のつのはさもあらはあれ」の一首が聯想されます。これまた、聖者ぶるなといふおいましめであります。外相を衒ふものは内心が空虚になりがちであります。だから、そんな外相を衒はず、ありのままの現實を愧ぢて、救はれ生かされてゆく愚禿の行持こそ素純な凡人道の啓拓てありました。

後記

地上には多くの道がありますが、自分の歩み得る道は唯一筋であります。人生の修道に於ても自分に相應しき道は唯一筋であります。しづかに私共は如何なる道を歩みつゝ、あるかを考へねばなりません。

私共はつねに謙虚な態度をもつて、すべて正しき姿を見、正しき言葉を聞きたいものであります。修飾をとり除いた素純な姿、眞實を語る言葉には、何ものをうち捨て、も耳をかしたものであります。古來景仰されてゐる聖賢の道には、敬慕のあまり多くの装を以て飾られてあるが少くはなく、これが爲にかへつてわが歩み近づきかねる恨みがありますが、親鸞聖人の道は、今に於ても人間の素純な姿に同感せしめつゝ、眞實の言葉をもつてわれらが歩みに近づかる、やうに覺えます。

いまこの聖人の道を語られる梅原眞隆先生は、京都賀茂の清嵐にちかく顯眞學苑を建立し、敬虔眞摯の同信とともに、専ら親鸞聖人の芳躅を慕ひ、顯眞の學を究め、如實の行を實踐せられつゝ、ある方であります。

此の「愚禿親鸞」の記述は、聖人の素描ではありませんが、はるかに顯眞の祖心を仰いで、ちかく愚禿のこゝろを簡明に表現されたもの、有縁無縁によらず、こゝに表現せられたる心行を住持せられたならば、かならず公明眞實の大道を拓き、人生の眞の幸榮を見出されるであらうと信じます。

敢て恭しくこの著を同信に願つ所以であります。

昭和十年五月廿八日

信 道 會 館 誌

信道會館ハ明治二十四年初代近藤友右衛門翁ノ創建スル
 トコロニシテ淨土眞宗ノ教場タリ當代ニ至リ時代ノ進運ニ
 應ミ佛教各宗ニ開放シテ教化求道ノ道ヲ拓キ財團法人信道
 會館ト改メ專ラ現代ノ名師高德ヲ招聘シテ日曜講演ヲ開筵
 シ以テ大乘佛教ノ普運徹底ニ努ム
 願レバ年ヲ閱スルコト四十有五年同信ノ人次第ニ其教ヲ
 増シ敬虔ノ念日々ニ醇キヲ加フルハ恭慶ニ堪ヘサルトコロ
 ナリ
 遺般乏クモ多年ノ教化事業ヲ罔彰セラルルノ榮譽ヲ荷ヒ
 愈々同信協力シテ朝家法輪ノ興隆ニ資センコトヲ期ス冀ク
 ハ江湖ノ諸彦斯ノ使命ヲ達成セシメラレンコトヲ

昭和十年六月一日印刷
 昭和十年六月五日發行

無斷轉載禁止

發行人 財團 信道會館	名古屋市中區南伏見町二丁目	印刷所 株式會社 一誠社	名古屋市中區千早町五丁目	發行所 信道會館	名古屋市中區南伏見町二丁目
				電話 二〇七二番 掛號 〇四九六番 一、二、三四番	

終

7
8

